蘇った納西族東巴教「求寿」儀式

夏　　宇　継
Xia Yuji
（COE共同研究員）

はじめに

2003年末から2004年初めにかけて麗江から迪慶へ雲南シャングリラの旅をした私は，この平和で安らかな「東洋のエデン」と誉れ高い神秘的な土地に大いなる感化をうけた．1997年に麗江古城が世界遺産に登録されたのに続き，麗江市東巴文化研究院編集の『納西東巴古籍訳注全集[1]』と，長江上流の三江（怒江・瀾滄江・金沙江）併流地区も，それぞれ「無形記憶」世界遺産と「自然と文化」世界遺産に登録された．この地に息づく納西族東巴文化に大いに魅了された私に，麗江市東巴文化研究院の張福龍氏より，60年以上も途絶えている東巴教「求寿」（延寿ともいう）儀式を協力して復活させ，後世に伝えようとの提案があった．それからの15ヶ月，我々は絶えず連絡を取り合った．中国民間文芸家協会の責任者であり納西族の著名な学者でもある白庚勝氏ら専門家の意見を聞き，老東巴たちの提案にも耳を傾け，資料を集めた．そして我々は，現地の予備調査をした上で初めて今回の儀式実施を決意したのだった．

私は2005年４月１日に日本を出発した．その日のうちに北京で中国社会科学院民族文学研究所の撮影技師の任春生氏とおち合い，翌２日朝，空路，雲南省麗江に向かった．夕方，麗江空港で麗江市東巴研究院張福龍氏の出迎えを受け，そのまま張氏の運転する車で目的地の玉龍納西族自治県塔城郷依隴行政村署明片五組[2]に向かった．今回の儀式を執行する上でのもう一組のグループ，すなわち麗江市東巴研究院の研究員兼東巴である和力民氏に率いられた麗江から招かれた東巴たちは，２日朝６時に麗江を出発して午後署明片に到着したのち，地元の東巴たちとともに具体的な準備作業に入っていた．こうして４月２日には，60年以上も途絶えていた東巴教「求寿」儀式復活を目的とした調査が正式に幕を開け，7日に成功裏に終了するのである．

Ⅰ　東巴教「求寿」儀式

東巴教は，納西族の原始宗教から創唱宗教[3]への過渡的な性格をもつ宗教である．そして3，40種類にものぼる宗教儀式は，東巴文化を表現し伝承する主な手段であり，象形文字により東巴経典に記載された内容は，さまざまな宗教儀式により表現され，宗教儀式として伝承される．これらの儀式は，或いは諸鬼を安撫し，或いは神霊の加護を祈り，人と自然，人と社会の関係を解釈しようとするものである．儀式は納西族先民の生産，生活と密接な関係にあり，豊かな文化的内容が蓄積されている．なかでも「祭天」「祭風」「祭三朶」「祭星」「祭署」「祭丁巴什羅」などはよく知られた代表的な儀式である．

「求寿」は，東巴教の祭祀活動が単一の儀式から次第に総合的かつ複合的な儀式に変化，発展してできたものであり，全面的であるとともに本質的な深さを持っていなければならない．実際には大中小の儀式が交錯し，有機的な組合せにより総合的な儀式を構成する．大規模な「求寿」は，大中小の儀式が少なくとも十数以上必要であり，およそ東巴教の幸福を祈る儀式と鬼を追い払う儀式が一つ一つ，一通りすべて行われる．鬼を追い払い災いを祓ったなら，往々にして幸福を祈るわけで，それらを繰り返すことによって儀式の効果がさらに高まる．それゆえ，東巴教のさまざまな儀式のなかで「求寿」は最大の儀式なのである．

「求寿」はまた，一般の人を対象としたものではなく，それ自体がもっぱら東巴のために行われるもので

ある．さらに「加威霊（ジイアウェイリン）」という特徴的な内容を含み，盛大な「加威霊」を通して，参加した普通の東巴たちに「神名」を与えるとともに神の威力，霊力を大いに付与する．そして華（ホア）神を招き，儀式の対象となる東巴とその一族の生命力を盛んにし，無限の活力をもてるよう加護を求める．「求寿」の過程においては多くの東巴舞が踊られ，にぎやかで壮観なその光景は多くの観衆を引き寄せる．

この儀式の膨大さ複雑さは３つの「多」と言われる．まず参加者の「多」さである．東巴だけでも2，30人は必要であり，多くの東巴の助手や，さまざまな雑事を手伝う者も必要である．さらには遠近からお祝いに来るものや見物に来るものなど，儀式全体としての参加者数は祝祭日に劣らない．つぎに時間的な「多」（長）さである．祭祀の期間は一般に１週間ほどにもなり，これに前後の準備と片づけを加えると半月近く必要である．３つ目は，かかる費用の「多」さである．この儀式が及ぶ鬼や神霊が非常に多いので，それらに捧げるいけにえの家畜，供物だけでも舌を巻くほどだが，それに参加者の連日の飲食，茶，酒の費用を加えると，その巨額の費用たるや，一般人ではとても負担できるものではない．こうした理由からめったに行われることはなく，たとえ新中国成立以前であってもめったに見ることのできるものではなかったのである．（60年以上前にこの儀式を行ったある東巴の家では，２年余りの準備を経てこの儀式を行い，終了後も２年をかけてこの儀式にかかわる借金をやっと返し終えたという．）新中国成立後においては，長期にわたる政治的な大変動により，この種の宗教活動を実施することはますます困難になっていたという事情がある．

Ⅱ 老東巴和秀（ホシィウ）氏

儀式を主となって執り行うことにすぐれた齢（よわい）80に近い老東巴和秀氏は，かつて麗江地区内で「求寿」に参加したことのある唯一健在の東巴である（写真１）．その60年以上前の儀式は彼の家族のために行われた．もしこの病気がちな老東巴が亡くなってしまったなら，この儀式を後世に伝える歴史の証人が失われ，その本来の姿を記録し，復活させるすべがなくなってしまう．また，たとえ不完全な資料に基づいてむりやり復活させたとしても，それでは正当かつ完全な条件を備えていないものとなってしまい，誰にも認められない筋の通らぬものとなる．

写真１　老東巴和秀氏と青年東巴和秀東（筆者撮影）

我々はもともと８月の夏休みにこの調査を行おうと考えていた．しかし８月は麗江の雨季であり，儀式を行うのには不適切である．それにもまして，病弱な老東巴和秀氏にとって山間地区での生活はたいへんであろうし，氏がこれから先どれほど健在でいられるか誰にもわからない．それゆえ，我々はこの緊急ともいうべき調査の予定をためらうことなく繰り上げて，新学期の始まったばかりの４月初めに行うことにしたのである．

幸いにも，今回の「求寿」復活の知らせを聞いた老東巴和秀氏はずっと興奮の中にあり，それはあたかも神霊より与えられた無限の力に支えられたかのようであった．何度か生死をさまようほどの大病を経た老東巴であったが，「この儀式をやり終えないで，どうして死ねようか」と元気を取り戻してくれたのである．

Ⅲ 青年東巴楊玉華（ヤンユイホア）とその一族を儀式の対象とする

今回の儀式は，雲南省麗江市玉龍納西族自治県塔城郷依隴行政村署明片５組に住む東巴，楊玉華（ヤンユイホア）（28歳，既婚）とその一族[(4)]を対象として行なわれた．この決定には以下のようなことが考慮された．

楊玉華の家は代々東巴で，すでに８代を数える．楊玉華は1986年に中学卒業後，祖父第６代烏洛（ウルオ）（故人，著名な東巴）のすすめにより，老東巴和順（ホシュン）氏（今回儀

式を執り行った老東巴和秀氏の兄弟）の開いた東巴文化学校で東巴になるための学習を始めた．現在，彼は東巴研究院で東巴としてのさらなる技術を学んでおり，2005年９月には若い東巴の代表としてアメリカへ文化交流に行った．兄の楊玉光（ヤンユイグアン）（32歳，既婚）も東巴である．

楊家では，第４代修納東子（シィウナトンズ）が，魯甸郷新主のある家で行われた「加威霊」に参加したことがあり，次のような話が伝えられている．このとき，修納東子は持参した拉旨鐸命（ラチドゥオミン）神像（画像）を祭祀の前に神座にかけた．儀式が始まり，神霊にいけにえを捧げる段階になったとき，勝利神に捧げることになっていた白犏綿羊（めんよう）が自分からその拉旨鐸命（ラチドゥオミン）神像の前に歩いてゆき，敬虔に跪いた．このことは人々を驚愕させ，その場にいた大東巴は「楊家は，この無類の威力を持つ拉旨鐸命（ラチドゥオミン）神像をよくよく供養しさえすれば，二度と加威霊儀式により威力，霊力を付与される必要はない」と言ったという．

しかしながらこの拉旨鐸命（ラチドゥオミン）神像は，第６代烏洛の時（1940年代初め），東巴文化研究者李霖燦（リリンツァン）氏[5]により収蔵されてしまった．1950年代以降，烏洛の２人の息子のうち長男烏久敖（ウジィウアオ）が東巴を学び，葬儀を執り行っていたが，社会的な変動と政治的な原因により学習を中断したので，以前に学んだものも忘れてしまったという．

そして1994年に第６代烏洛が世を去った．祖先伝来の拉旨鐸命（ラチドゥオミン）神像も祖父により李霖燦氏に贈られてしまった．それゆえ楊玉華が威信のある東巴になるためには「加威霊」によって威力，霊力を付与されることが必要であり，我々としてもこのような伝奇的色彩を持つ世襲の東巴宅で儀式を行うことは我々の希望に叶っていた．こうして双方の願いが一致し，今回の決定となったのである．

Ⅳ 署明片の概況

署明片は雲南省麗江市玉龍納西族自治県塔城郷依隴行政村に属し，地理的には麗江の西北方向にあたる（図１・写真２）．麗江古城よりまず西に行き，石鼓の長江第一湾を経て，金沙江を溯り，北上して塔城郷まで151キロ．そこから西南に依隴溝（谷間）に沿って上ること15キロで依隴行政村に着く．さらにそこから南に８キロ，峠を越えたところが署明片である．

署明片は納西語で「初補考（チュプカオ）」といい，署明は漢語訳

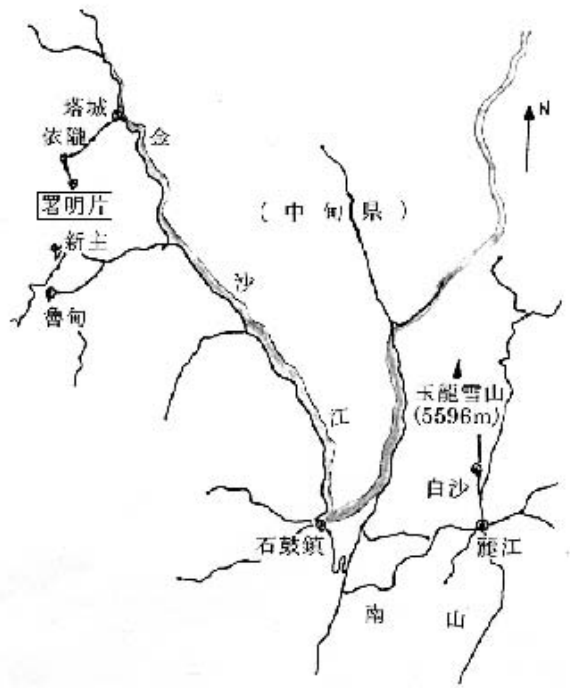


図１　麗江市玉龍納西族自治県地図

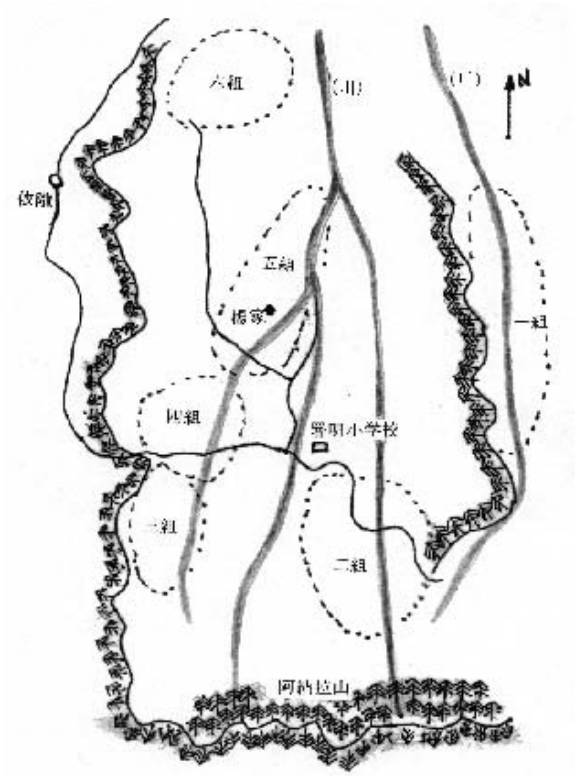


図２　署明片の地図

である．「初」は鉱泉水．特有のにおいがあり，当地の人々は「臭水」と呼ぶ．「初補考」とは，こうした鉱泉水の出てくるところという意味である．この地の鉱泉水はリューマチなどの疾病に効き目があるので，毎年立夏になると，人々は誘い合って鉱泉水の泉に出かけ，そこでご飯を作り，水を飲み，水浴をする習慣である．

署明片は６つの組に分かれていて（実際は６つの自然村である），その６つの組は付近数キロあまりの緩やかな山地に分布している（図２）．南側は海抜3,880.5ｍの阿納拉山の山麓で，全体の地勢は南高北低，東西には阿納拉山の支脈が走り，三方を山がめぐっている．山上は草木がよく生い茂り，木材資源が豊富である．これに加え，南端の山麓には４本の川の源である鉱泉水の泉が何箇所かあり，川の水は南から北へ音を立てて村に流れ込む．自然はすばらしく美しく，空はあくまで青く，緑の山々に清らかな水の流れるこの地は，まさに天然の浄土である（写真２）．百歳を過ぎた長寿の老人がいたことも，癌などの現代病を患う人がいないのもうなずける．

６つの自然村（組）のうち，３組の海抜が最高で2,770メートル，６組が最低で海抜2,650メートル，寒冷山間地区に属する．東側の山が高いので，日射時間が短く，海抜が高く，四季がはっきり分かれている．冬は雪が降り，積雪は１ｍに達する．一年中西北の風が吹き，年間最高気温は25度，最低気温は零下14度，「巣の中の鶏卵もみな凍る」といわれる．土質は多くが黒土で，６組にいくらか赤土のところがあるだけである．

2004年５月24日の統計では，署明片全体で170戸，788人．そのうち１組は31戸，149人，２組は37戸，170人，３組は26戸，115人，４組は26戸，110人，５組は23戸，118人，６組は27戸，126人である．

署明片の住人はいずれも納西族で，東巴と東巴教を信奉している（写真３）．和姓と楊姓の２姓があり，その源は２つある．考証によると，１つめの源はつぎのようである．１組から５組の和・楊２姓の先祖は，およそ250年前（清の乾隆20年，1755年ごろ），麗江南山（麗江盆地の南部一帯をいう）より移住し，この地を開拓した．清朝政府が麗江で「改土帰流[(6)]」を実施したのが1723年であるから，そのあとで移住してきたといえる．現在の住民はその末裔である．

もうひとつの源は，６組「訓古沙」村の人たちだが，みな塔城郷依隴巴甸から移住してきた和姓の納西族である．彼らはおもに露魯支系（リス族と納西族が融合してできた支系）の納西族で，納西語を操るが，「祭天」や葬礼の儀礼は他の納西族とは異なる．

署明片の人々は，これまでずっと主に牧畜業を営んできた．祖先が南山よりこの地に移住してきたのも，ここの広い山林や牧場が気に入ったからだといわれている．現在では馬を飼うものが多く，各家では平均１匹は飼っている．そのほか，さらに犏牛[(7)]，山羊，綿羊，豚を飼っている．牧畜のほか，寒冷山間地区に適した裸麦，蕎麦，じゃがいもなどの作物を作っているが，1987年にマルチ栽培を取り入れて以来，トウモロコシの栽培がやっと増えてきた．このほか，自家用の野菜，クルミ，収益の良い白雲豆を作っている．海抜が高いので水稲栽培には適さず，食べる米は作った作物と取

写真２　署明片（筆者撮影）

写真３　村人たち（筆者撮影）

り替えてもらっている．

ここでは甘い山間の泉の水を飲み，燃料は自分で切ってきた松を使い，冬は栗樹（クリではない）を焼いて作った炭の火鉢で暖を取る．

人々の牧畜業，農業以外の収入といえば，秦帰（しんき），木香（もっこう）など漢方薬材の栽培，松茸の採集，竹細工，鉄の細工などがある．しかしながら，署明片の経済はあまり発達しておらず，加えて農業の再生産，各種生活用品の購入，教育にかかる支出を考え合わせると，人々の生活は豊かではない．第５組を例にとると，衣食住に問題はないが，一人当たりの年平均収入は300元ほどで，やはり貧困地区に属する．1982年に電気が通じ，90年代にテレビを見ることができるようになった（大小，カラー，白黒はさまざまだが，半分以上の家庭にある）とはいえ，いまだに電波が弱くて電話を設置することもできず，携帯電話など使うすべもない．さまざまな原因により，停電もいつものことである．

このように経済発展が緩慢である原因の一つは，交通が不便なことにある．署明片にとって，塔城郷への道路が外界と結ばれている唯一の道路である．この道路は文化大革命後の1980年代に通じたもので，この山間地区の発展に重要な役割を果たしてきた．しかし当時資金の不足により道路の質が初めからあまりよくなかったことに加え，長い間補修できなかったので，現在では交通路としては麻痺あるいは半ば麻痺の状態にある．人々は全面的な改修を是非にと願っているが，どうやら，県政府に申請したその必要経費８万元は容易に解決されそうにない．それは貧困を脱し豊かになるためにどうしても必要な道路であり，私としても一日も早い改修を願っている．

また郵便配達員もここまでは来ないし，商店もない．物を買ったり，郵便を取ったりするのに十数キロ離れた依隴行政村まで行かねばならない．天気の良いときはトラクター（３戸が所有）もあるが，雨でも降れば，もともと狭くてでこぼこ，急で曲がりくねった山道はぬかるみ，危険になる．歩くしかない．５組には学校はなく，１年生，２年生は２キロの道を歩いて学校に行くが，３年生以上はもっと遠くまで行かなくてはならない．一般には小学校までで，少数が中学に行く．女の子も教育を受ける．いままでに２人の大学生が出て昆明で働いている．中等専門学校に行った者もわずかだがいる．

Ⅴ 署明片における東巴教の歴史と今回の「求寿」儀式の現実的な意義

署明片の住人が1755年ごろに麗江南山より移住してきたことはすでに述べたが，そのうち和姓の先祖は南山の蒙蘇村から，楊姓の先祖はそのとなりの恭美村から来たという．納西族東巴教の考えでは，死者のために葬儀と亡霊済度の儀式を主になって執り行う東巴は，必ず他の氏族（あるいは一族）の東巴でなければならず，そうしてのみ死者の亡霊は済度されて，冥界の先祖の集居地に行くことができるという．もし自分の一族の東巴が主になって執り行ったなら，亡霊は家族や肉親を名残り惜しんで離れたがらないであろうと考える．それゆえ，上記二村の十戸は約束し，それぞれ自分たちの東巴祭司をともない，東巴経典と法器をもち，ともに署明片にやってきた．そして互いに依存しながら，この肥沃で草木のよく生い茂った高山の牧場で伝統的な東巴教を信仰し，山林を開墾して，人口を増やし，生きてきたのである．

署明片の東巴教の源がまさに麗江南山にあり，その麗江南山は早くも明代には東巴教の伝播と活動がかなり盛んな地区であったことから，署明片の東巴教の歴史的淵源は唐宋時代の麗江白沙[8]にまで遡ることができる．それゆえ，署明片の東巴教の根源は麗江東巴教と一脈通じており，麗江南山派東巴教の延長といえる．同時に，署明片は，塔城郷依隴，巴甸一帯および魯甸郷新主一帯の納西族居住地とつながっており，山河も続いている．阿納拉山を越え，或いは塔城郷行政村を経ると，さらに維西県の納西族，リス族，チベット族の居住地ともつながっている．それゆえ，署明片の東巴教文化も周辺地区の民族の言語，宗教，習俗などの文化を吸収し，鮮明な地域的特色を持っている．しかしながら，署明片の人々が他民族文化を吸収する場合にも，自民族文化の伝統を放棄しないのが前提であり，それが今日，納西族東巴教が署明片で生き続けているひとつの重要な原因である．

署明片の祖先がこの地に移住してきてからの二百数

十年の間に，塔城と魯甸の東巴教は新しい段階に発展した．清朝道光年間，署明片と山一つ隔てた塔城郷巴甸村に和永公という名前の東巴大師が現れた．彼は医術と法術において近代東巴文化史上に一里塚を築いた人物であり，麗江の土司(とし)木氏[9]の末裔である木老爺の妻の病気を治し，「医明法精」の扁額を賜った．そののち，やはり署明片と山一つ隔てた魯甸郷新主村に，さらに東巴王と呼ばれた大東巴和世俊が出現した．この2人の門徒は非常に多く，大きな影響を与え，近現代の納西族東巴教は新しい高潮期を迎えた．

20世紀初頭に到り，署明片における東巴教の活動は非常に盛んになった．多くの東巴祭司が出現し，大量の東巴経典，法器を有するようになった．1940年代，先に紹介した李霖燦氏が魯甸郷新主村に来て東巴文字を学び，国立博物館のために東巴経典や法器を収集したが，このとき署明片においても署明片の東巴が書いた東巴経典や画像を収集したという．

1930年代から40年代にかけて，魯甸郷新主村と塔城郷巴甸村において，相前後して２回の大規模な「求寿」が行われた．これらの儀式には参加した東巴の人数も非常に多く，大きな社会的影響を与えた．またこのころ現在の署明片３組（勾局坡村）の和姓の東巴烏莎は長年にわたって準備をしたうえで，塔城郷巴甸村の大東巴，太安郷汝南化村の大東巴，中甸県白地村の大東巴などを含む近隣の大東巴たちを招き，盛大な「求寿」を行った．この儀式の影響は今日でも存在し，この儀式に参加した老東巴たちは，生前この話になると，みな昨日の事のように記憶がよみがえるようであったという．

1950年代から80年代にかけて，署明片でもほかの地区と同様に東巴文化は破壊され，東巴は蔑視された．しかし，80年代中期になると署明片の東巴文化もやっとよみがえってきた．和順（故人）・和秀兄弟らの世代の東巴は力を尽くして継承者を養成し，まさにその尊い努力により，署明片の東巴文化は長い中断の時期を越えて継承され，新しい後継者を得た．中年世代の楊志堅と和世先，若い世代の和秀東，楊玉華，楊玉勛は，こうした背景で養成された東巴である．

我々が今回の儀式の場所として署明片を選んだのは，この地が広く篤い東巴信仰の基礎を持っているだけでなく，60年前の最後の「求寿」が行われた地であり，さらには美しい昔のままの自然が保たれ，人々は夜であっても戸締りをする必要のない純朴な風俗を持っているからである．こうした現代の浄土，納西文化の生きた化石ともいうべき環境が，予想よりさらにすばらしい絶妙な結果をもたらしたのである．

Ⅵ 参加した東巴の陣容

今回の儀式には，老東巴和秀氏，著名な研究者でもある和力民氏を含む28名の東巴（地元署明片とその付近16名，麗江より12名．いずれも男性）と10余名の助手が招かれた．彼らは経典を100冊以上も暗誦している，踊りの師匠であるなど，みなそれぞれの技を持つ選ばれた東巴たちであった（年数は東巴学習年数）．

1　地元署明片とその付近より参加した東巴（宗教職能者）16名

（１）和秀（79歳）署明片４組　世襲．儀式を主となって執り行う東巴．今回の儀式も主となって執り行う．「求寿」に参加したことのある唯一健在する老東巴．

（２）和明（72歳）４組　世襲の第５代．東巴舞大師，1997年に来日．和秀東，楊玉華，孫の和元増を指導．

（３）和貴華（45歳）４組　世襲．和順（和秀の兄弟）の子．３年，地元の儀式を執り行っている．

（４）和世先（64歳）１組　師伝．和順の弟子．20年，経典の書写に優れている．

（５）和秀東（26歳）４組　世襲．和順の孫．60余年前の「求寿」は彼の家のために行われた．小学校に数年間行っただけだが，東巴経典を熟読し，東巴としての活動に非常に熱心に打ち込み，高く評価されている．現在，東巴研究院でさらなる学習に励んでおり，訪米したこともある．今回の「加威霊」では，老齢の和秀の身代わりとして，神梯の上から諸東巴に威力を与えた．

（６）楊玉華（28歳）５組　世襲の第８代．今回の「求寿」は彼の家で実施された（Ⅲ.青年東巴楊(ヤン)玉華(ユイホア)‥を参照）

（7）楊玉光（32歳）5組　世襲．楊玉華の兄．小学校卒業．村内の儀式を執り行っている．

（8）楊志堅（60歳）1組　世襲の第5代．読経に優れている．

（9）楊成盛（21歳）4組　師伝．10年，東巴舞に優れている．和秀東，楊玉光より学ぶ．

（10）楊桂耀（40歳）2組　世襲．20年以上．のどがかれていて読経は得意ではないが，占いと東巴舞に優れている．

（11）楊建華（31歳）2組　師伝．小学生時代から東巴を学び，東巴舞に優れている．和秀東，楊玉光より学ぶ．

（12）楊新永（56歳）1組　師伝．20年，読経，祭場設置に優れている．

（13）楊玉順（70歳）5組　師伝，祭場の設置．かつて村の生産隊隊長であった．今回は（楊家一族の）祭天場において儀式を行うにあたり，族長として参加した．

（14）楊国耀（40歳）2組　師伝．7，8年，占いに優れている．

（15）楊俊（23歳）塔城郷隴巴村　世襲．6年，読経に優れている．

（16）和文鳳（61歳）塔城郷依隴行政村巴甸2組　世襲の第9代．父の和学智は2種類の東巴文[10]に精通した数少ない有名な東巴である．和文鳳本人はいつも葬儀やいけにえの殺生方面を司る東巴である．二人の子どもも東巴を学んでいる．

2　麗江より参加した東巴（兼業も含む）12名

（1）楊文吉（73歳）麗江市玉龍納西族自治県塔城郷依隴行政村巴甸1組（同県白沙郷神龍三疊水公司）世襲の第11代．6歳より父に学ぶ．12代（子）は東巴を学ばなかったが，13代（孫）は東巴である．東巴経典の8割近くを読むことができる．常に儀式を主となって執り行っている．

（2）楊玉勛（30歳）署明片5組（神龍三疊水公司）　世襲だが，父は東巴ではなかった．楊文吉の外孫，楊玉華のいとこにあたる．かなりの部分を独学し，数十の東巴経典を読むことができ，一部を暗唱している．20種類以上の東巴舞を踊ることができる．今回の儀式では，非常に活躍したうちの一人である．（今回は「楊玉華のいとこ」という地元の東巴の立場と，麗江から来た東巴という二重の立場で参加している）

（3）和学武（25歳）（同上公司）　師伝．楊文吉の弟子．

（4）楊学紅（55歳）（同上公司）　師伝．楊文吉の弟子．

（5）和盛典（46歳）（東巴造紙場）　世襲．父より学ぶ．読経に優れている．

（6）木琛（32歳）（麗江博物院）　師伝．老東巴和学文（82歳）を師として，十数年．写経，絵を描くことに優れている．

（7）和志偉（36歳）（麗江博物院）　師伝．1995年に麗江教育学院英語学科を卒業後，老東巴及び和力民より東巴を学び，納西族の文化を発揚することを決意．

（8）和力民（51歳）（麗江市東巴文化研究院・研究員）師伝．今回の儀式を主となって指揮した東巴である．1982年，雲南民族大学卒業．その後2年間北京大学哲学科で内外の宗教学と哲学を学ぶ．20余年来，納西族東巴教経典と東巴教習俗の調査，翻訳，研究に従事．研究論文50余篇を内外に発表．西欧七カ国，台湾，インドを訪問，スイスのチューリッヒ大学では講義を行う．1990年より東巴文化の継承の実践と研究に力を注ぎ，麗江納西文化研習館を創設．麗江市古城区金山郷貴峰三元村に東巴文化伝承基地として東巴文化夜間学校を開設．「祭天」「祭自由神」などの儀式を本来の姿で復活させた．弟子に20余人の青年東巴がいる．1998年，中甸において老東巴習阿牛（90余歳）による和力民本人のための「加威霊」が行われた．

（9）和正剛（31歳）麗江古城にて東巴工芸店経営，師伝．和力民の弟子，8年．5冊ほどの経典を諳んじる．東巴舞，木彫りに長じていて麗江に旅行で来た台湾女性と結婚している．

（10）和力川（31歳）麗江市古城区金山郷貴峰三元村（農民）師伝．和力民の弟子．7年．6,7冊ほどの経典を諳んる．絵を書くこと，東巴舞に優れ，今回は「祭天」を取り仕切る．

（11）和兆武（35歳）同上三元村（農民）　師伝．和力民

の弟子．７年．５冊ほどの経典を諳んじている．

(12) 和強飛（36歳）同上三元村（農民）　世襲，祖父が東巴．代々聖地に行って「加威霊」をしてもらう家柄．

Ⅶ 今回の大規模「求寿」儀式の出発点と具体的な日程の決定

実際に，一つ一つの「求寿」は，東巴経祭祀活動の筋道と，実施する家およびその主人の具体的な経歴や状況にしたがって祭祀日程を決めねばならない．最も優れた東巴であるなら，さまざまな状況に即応し，適宜融通をきかせて儀式を組み合わせることができなければならない．過去の例がこうしたので今回も単にそうするというやり方ではいけないし，ただ多くの経典を読めるだけでは必ずしも大東巴ではなく，少なくとも最も優れた東巴ではありえない．

また「求寿」の規模の大小は，実施する家の状況と具体的な要求にもとづいて決められる．大規模「求寿」の核心は，「加威霊」と「求寿」であり，それ以外の儀式は，この二つの儀式のために存在する．それゆえ，主となってこの儀式を執り行う者は，それぞれの儀式に精通し，内容の核心を把握し，東巴教「求寿」の理論に基づき，秩序立てて日程を組まなければならない．

さて，楊玉華の父親烏余（楊西）にとって今回の大規模「求寿」を行う目的は，次男楊玉華が「加威霊」によって威力，霊力を付与され，家人が神の加護を受けることのほかに，もう一つあった．すなわち，烏余のおじ（楊玉華の祖父烏洛の弟，注(4)家系図参照）は，若いころ兵隊に行ったままずっと音信不通になっていたので，楊家としてはこのおじの亡霊が祟ることを恐れ，これにかかわる儀式を入れてほしいと希望した（これが呆鬼祭祀として実施されたことは，後述）．こうして儀式はより全面的なものが求められた．

このため和秀，和力民両氏はくりかえし協議を重ね，事前の調査も考慮し，また私たちの意見も聞いて以下の儀式次第を決定した．この儀式次第は具体的な状況に即応し，かつ重要な部分についてはいささかの漏れや疎かなところもないものであり，綿密な準備の下，すべての儀式を６日間に集中して行ったのだった（写真４・５）．

儀式は署明片５組の楊玉華宅で行われた（図３）．

写真４　主となる３神座の前で読経する東巴たち（筆者撮影）

写真５　東巴文字で書かれた東巴経典（筆者撮影）

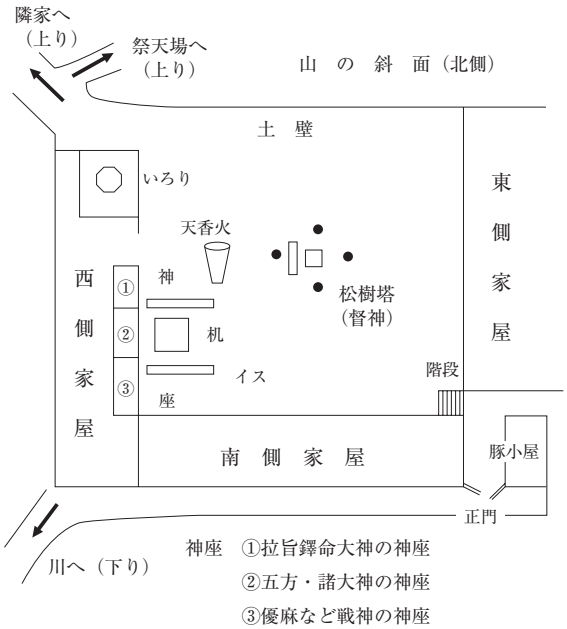


図３　楊家中庭の基本配置図

写真６　北側斜面の上から見た楊家（筆者撮影）

主な祭場は楊玉華宅の中庭，居室，周囲であり，そのほか村落各地や付近の風光明媚な山頂，一族の祭天場などでも行われた．

楊玉華宅は南面の傾斜地に建てられ，中庭を囲んで東南西三方に建物を配する．北側には山の斜面が広がり，ちょうど天然の見物席となっていた（写真６）．中庭に面した西側家屋の廊下には主となる３つの神座が設けられた．納西族では北側が上座であり，北側から拉旨鐸命（ラチドゥオミン）大神の神座，五方および諸大神の神座，優麻（ヨウマ）など戦神の神座が設けられた．中庭の中央には上に鶴の飾りを施した松樹塔（松樹神柱，長寿松柱，松樹「督（ドゥ）」神などとも呼ぶ）が高々と立てられ，五色の糸でつくられた幾何学的図案や紙の花などで美しく飾られていた．

１日目（2005年４月２日）

①主祭場の飾りつけ，神座の設置，「焼天香」．

②依古敦（イグドン）（麗江大研鎮の）東巴を迎える儀式．

２日目（４月３日）

①呆（ダイ）鬼祭祀を附した瓦（ワ）鬼祭祀儀式．

②湊（ツォウ）鬼祭祀および大規模除穢儀式．

③署（シュ）神寨の設置．署（シュ）神の招来と安撫．

３日目（４月４日）

①大規模署（シュ）神（自然神）祭祀儀式．

②楊家の斯補（スプ）（近三代）祖先神を招く儀式．

③嘎（ガ）神（戦神･勝利神）祭祀儀式．

④星神祭祀儀式．

４日目（４月５日）

①「祭風」儀式．

②景（チン）神（雷神），本（ベン）神（稲妻神）祭祀儀式．

５日目（４月６日）

①「加威霊」儀式．

②大規模「焼天香」儀式．

③華（ホア）神など大神を招来しての，賜福および「求寿」儀式．

④諾（ヌオ）神（家畜神）祭祀儀式．

６日目（４月７日）

①山神祭祀儀式．

②三朶（サンド）神（地域神）祭祀儀式．

③「祭天」儀式．

④竜神を送る儀式．

⑤素（ス）神（家神）祭祀儀式．

Ⅷ 儀式の具体的な内容[11]

１　１日目（2005年４月２日）　竜日[12]

この日，私は署明片に向かう途上にあり，この日の準備などについては，和力民氏より話を聞いた．

まず，楊玉華の家では，この日早朝より付近の東巴，手伝いの人々を頼み，祭祀に必要な品々を作った．中庭に面した西側家屋の廊下に神座を設け，中庭中央に松樹塔を立てた（図３）．

午後，署明片５組明兆村の入り口，聶昴茨詹肯（ニエアン ツチャンケン）路口（四辻）に松の枝で作った門を立て，両側の門柱に東巴文字のめでたい対句を貼った．道の北側の大きな石の上で天香火を焚き，さまざまな供物を供えた．松枝の門の内側には机を二つ並べ，その上に青松の小さな枝葉を撒いた．７,８人の地元の東巴が東巴服を着て法器を持ち，依古敦（イグドン）東巴の到着を待った．

和力民氏の率いる依古敦（イグドン）東巴の一行12人は，早朝６時半に麗江三元村を専用の大型バスで出発し，塔城郷依隴行政村でトラクターに乗り換え，午後４時半に署明片５組明兆村の入り口に着いた．さっそく東巴服に着替え，法器を持ち，東巴舞を踊りながら松枝の門を入った．そして待っていた主人側署明片の東巴と掛け合いで踊り，主人側が歓迎の意を表すとともに，主客双方は互いに相手方への敬意を示した．客側の依古敦（イグドン）東巴たちは，机の周りのいすに座るよう勧められ，座ると，楊玉華と楊玉勛がその前に跪いて礼を行い，美酒と100元を盛った盆を献げ，このたびの「求寿」を

執り行い，神に天香火を焚いてくれるよう希望した．和力民氏は客側の東巴を代表して，酒とお金を受け取り，酒をささげて吟唱した．その大意はつぎのようである．

「高い天におびただしい星が出た，今日の星座はすばらしい．大地に青草が生えた，今日の草は青々としている．左の太陽は暖かく，今日の太陽は暖かい．右の月は明るく照らし，今日の月は最も明るい．上方（北方）に住むラサのチベット人は年運を上手に占う，今年の年運は良く，鶏年の年運は良い．下方（南方）の下流に住む白族人は月運を上手に占う，今月の月運は良く，二月の月運は良い．天地の中央に住む納西人は日運を上手に占う，今日の日運は良く，二月二十二日，竜日のこの日は日運が良い．この年運，月運，日運ともに良き日に，すばらしい土地，署明村の古徐群体に属する主人の一家が,年齢が不足なら年齢を求め，寿命が不足なら寿命を求め，出産が不足なら出産を求め，繁栄が不足なら繁栄を求めるこの日に，我々麗江から来た賢者の東巴は，主人の一家のために幸福を求め寿命を求める儀式を行い，主人の一家のために神霊を供養し，署明村の東巴と協力し，ともに祭祀を執り行うためにやって来た．ここにおいて，天上の盤神と禪神，嘎神と沃神，吾神と恒神，天神，地神と柏神，素神と諾神，署神と龍神，端格神と優麻神，注神と華神，孜神と烏神など二十余種類の大神[13]を供養し，酒を差し上げて祭り，祭司たちがこのたびの儀式を無事終えることができるよう神霊の加護を願う．そして主人の一家にとって祭祀が有効であるように，矢を射れば標的に当たり，幸福を求めれば幸福を得，寿命を求めれば寿命を得，子宝を求めれば子宝を得，家畜の繁殖を求めれば繁殖を得，神霊の賜る福と加護を得られるよう願う．」

和力民氏は，以上のように吟じながら柏の枝に酒を付けて主人の上に撒き，恩恵と祝福を与えた．

そのあと，依古敦東巴たちは立ち上がり，手に揺鼓と盤鈴を持って天香火の傍らに行き，二十余種類の大神に天香火を焚き，供物を捧げて祭った．そして大神が降臨し，祭司に威力を与えてくれるよう祈った．和力民氏が「天上の神霊よ，降臨されよ．鶴が舞い，鷹が飛ぶように降臨されよ．高山の神霊よ，降臨されよ．豹が跳び，虎が走るように降臨されよ．水中の神霊よ，降臨されよ．カワウソと魚が遊ぶように降臨されよ．カッコウが鳴いて，陽光をより明るく輝かせる．神霊が降臨され，祭祀の威力を助けてくださる．」と吟じると，依古敦東巴と楊家（と付近）の東巴たちはともに東巴舞を踊り始め，儀式の行われる楊家の方に向かった．楊家の代理である署明村の東巴二人が先に立って道案内し，依古敦東巴がこれに続き，最後が署明村の東巴たちである．村の入り口から楊家までの道のりは，絶えず太鼓や鈴の音が響き渡った．

楊家の中庭に入ると，東巴たちはまず神座の前に行って神に感謝を捧げ，祈りをあげた．そのあと庭の中心に立てた松樹塔を時計回りに回りながら東巴舞を踊り，鬼怪を鎮めた．太鼓や鈴の音が急にあわただしくなり，東巴舞が急に終わると，天香火が焚かれ，東巴祭司を迎える儀式は終わりを告げた．

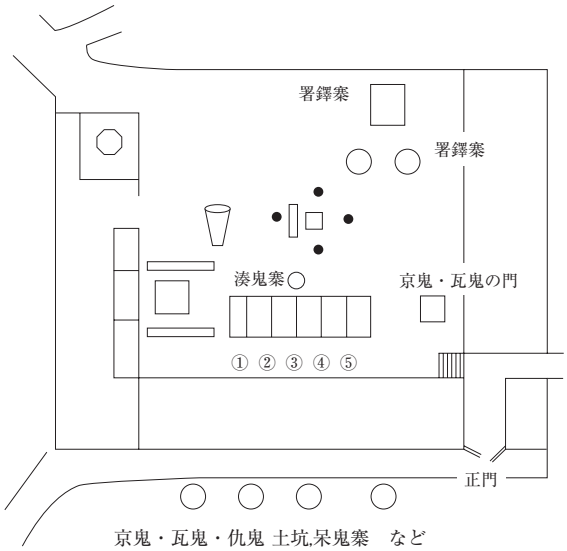
一休みしたあと，和力民氏はすべての東巴を南側の部屋に集め，打ち合わせを行った．まず和秀氏とともに決定した５日間の具体的な日程を説明し，次に人員を確認して具体的な役割をきめ，さらに地元の東巴と麗江の東巴が心を合わせ今回の儀式を立派にやり遂げるよう皆を励ました．

２　２日目（４月３日）蛇日

早朝，我々の乗った車が途中で故障，突如，急行軍での山越えとなった．３時間の行軍を経て署明片第５組に着いた我々は，和力民氏の率いる先頭部隊と無事合流することができ，すぐに調査が開始された．

（１）呆鬼祭祀を附した瓦鬼祭祀儀式

瓦鬼は阿鬼ともいい，人々の言葉を原因とするいざこざによって生み出される鬼（口舌是非鬼）である．同類には京鬼，季鬼，其鬼，空鬼，崩鬼などがいる．東巴教経典には「小さな矛盾が絶えず繁殖してますます大きな矛盾を引き起こし，最後には戦争でなければ解決できないような状況に至る」と述べている．楊家三代の祖先および主人の現在の生活においても，こうしたことは免れられないもので，言葉を原因とするいざこざの伝播と繁殖は瓦鬼を引き込み，家人に祟り，災禍をもたらす．それゆえ必ず瓦鬼を祭祀し，付きま



鬼寨　①神門 ②人門 ③湊鬼門 ④穹遷依勒 ⑤党鬼木偶

図４　４月３日の配置図

とわないようにするのである．

東巴教経典の呆鬼は無頭鬼である．納西族の伝統的な信仰では，臨終のとき，肉親がそばにいて道を指し示し，先祖三代の名前を言い聞かせ，銀・米・茶葉を白紙に包んで死者の口の中に含ませる，こうして初めて死者は自分の祖先を見つけることができると考え，その後の死者のための済度儀式を通じて，死者が祖先神になるという．これに対して，よその土地で非業の死を遂げた場合，その亡霊は呆鬼に変わる．凶鬼，悪鬼として世の中にふらふらとただよい，永遠に済度されず，肉親や，ひどい場合には子孫にまでたたる．先に述べた楊玉華の祖父烏洛の弟も，よその土地で死んだと考えられるので，その亡霊がすでに呆鬼と一緒になっていて，家人にたたるかもしれない．これを防ぐため，必ず呆鬼祭祀を附け加えなければならないのである．

○神座，鬼寨の設置（図４）

神座は，すべて中庭に面した西側家屋の廊下に設け，北から南に拉旨鐸命大神の神座，五方および諸大神の神座，優麻など戦神の神座の三つである．天香火は神座の前におき，中庭の松樹「督」（松樹塔とも）前の神座はただ供養のためだけで，この儀式では具体的な役割はない．

鬼寨方面は，京鬼，瓦鬼の門は中庭の東南に設けられ，季鬼が入ってこないように遮る祭木は正門の傍らに置かれた．京鬼，瓦鬼，仇鬼（仇敵が変わった鬼）の土坑と呆鬼寨，党鬼の木偶（木の人形）などは，それぞれ正門外の道を挟んだ南側に設けた．

○祭祀の順序

①神座の傍らで開壇，神を招く．

②中庭で鬼の来歴を述べる．

③仇鬼土坑の傍らで仇鬼魂を招く．

④呆鬼寨の傍らで呆鬼魂を招く．

⑤中庭で山羊，鶏を殺し，鬼へいけにえとして施す．血を捧げて祭り，煮たものを捧げて祭るなどする．

⑥神座の前で盧神（創世男神）を招来し，盧神に威力を付してくれるよう願う．

⑦京鬼門，仇鬼坑，呆鬼寨の傍らで鬼に食べ物を施す．

⑧仇鬼坑の傍らで楊家主人のために招魂を行う．

⑨鬼を追い払い，党鬼を送る．

⑩瓦鬼，呆鬼を鎮めてくれるよう神に願い，東巴舞を踊り，京鬼，瓦鬼の門寨（住むところ）を取り壊す．

⑪面偶（粉をねってつくった人形）を用いて主人の身の上の災厄を吸い取らせる．

⑫呆鬼を追い払い，呆鬼鬼寨を取り壊す．

⑬仇鬼を鎮め，仇鬼を殺す．仇鬼祭木を切り，（仇鬼を）殺して埋め，とげのある枝でこれを抑えつける．

⑭楊家主人と参加者は正門のところで縄跳びを三回し，こうして瓦鬼のもたらした災厄を退ける．季鬼が入ってこないように遮る祭木を，正門の戸の框の上方にわたす．ひよこをいけにえとして卡呂面偶に施し，その面偶を捨て去り，祭司の言行の過失により引き起こされた災厄を解除する．

⑮季鬼，瓦鬼など諸鬼を追い払う．鬼を防ぎとめるための竹片を地面に挿し，鬼が来ても追い返せるようにする．

⑯神を送る．

（２）湊鬼（穢鬼）祭祀および大規模除穢儀式

「湊」は，「穢れ」の意味を表す納西語である．東巴教経典によると，湊は最初男女の性の乱れから発生し，そののち，およそ倫理や自然の法則，言行に合わないことからも湊鬼が発生するようになったという．湊鬼の危害は，一に天地と万物を穢し，二に人間に祟ることである．楊家の現在の生活にしてもその近三代

写真７　いけにえの牛を殺す東巴（筆者撮影）

祖先にしても，言行の不適切なところは免れられないので，それらが湊鬼のたたりを引き起こす．このため，湊鬼の祭祀を行ない，穢れを払わなければならない．

○神座，鬼寨の設置（図４）

西側家屋廊下の三神座および中庭の松樹「督」前の神座はそのままである．ただし，この儀式においては戦神優麻神座のうち佐体優麻神が重要な神霊である．

鬼寨は，中庭の東南に設けられ，西から東に向かって神門，人門，湊鬼門，弯遷依勒(14)（先の曲がったT字の木の棒），党鬼木偶の配列である．三番目の湊鬼門の傍らに，唐箕に木牌，杉の枝，紙の旗を挿して作った湊鬼寨，「湊周苦」を置く．党鬼木偶の傍らで除穢火をたく．

○祭祀の順序

①神座の傍らで開壇，神を招く．

②鬼寨の傍らで湊鬼の来歴を述べる．

③面偶を用いて災厄を吸い取り，鬼の源を解除する．雄鶏一羽と杉の枝のたいまつで穢れを祓う．

④中庭の東南の隅で鬼にいけにえを施す．雄牛，山羊，豚，雄鶏各一頭である（写真７）．

⑤湊鬼の来歴と除穢の歴史を述べる．

⑥優麻神など諸神霊の神壇への降臨を迎える．

⑦２組に分かれ，村の水源２ヶ所に聖水を汲みに行く．水源では天香火を焚き，署神に薬を献上し(15)，署神署鬼に水汲みなどによる損失を償う．聖水を汲んで来ると，神座の前で神霊に除穢をおこない，楊家と参加者に穢れを聖水で洗って除かせる．

⑧盧神（創世男神），沈神（創世女神）を招来し，威力を賜るよう願う．

⑨湊鬼に食べ物を施し，党鬼に食べ物を施す．

⑩湊鬼を追い払い，党鬼を追い払う．

⑪楊家およびすべての参加者は，湊鬼門を入り，人門，神門を通り，三回聖水で洗って穢れを除く．

⑫佐体優麻神の降臨を迎え，優麻神舞を踊り，湊鬼寨を取り壊す．

⑬湊鬼を追い払い，湊鬼の木偶，供物を唐箕に入れて正門の外に担ぎ出し，川まで下って行き，下流に捨てる．

⑭神を安んじる．

（３）署神（自然神）寨の設置（図４）．署神の招来と安撫

この日の夕方，中庭の東北に署神寨，署鐸寨，空崗寨を設置した（鐸と空崗は署の種類）．

○祭祀の順序

①署神を招き，『署神之来歴』などの経典を読む．

②多くの署神のために明かりをともす．

③涅補労端神を迎える．

④署門を閉め，署神を安らかに眠らせる．

３　３日目（４月４日）馬日

（１）大規模署神（自然神）祭祀儀式

署は，納西族東巴教の自然神である．東巴経典はつぎのように述べている．人と署はもともと同父異母の兄弟であった．のちに兄弟が分家し，人類は村落，耕地，家畜を得，署は山林，水源，野生動物，鉱物を得た．人類の祖先と署神の間には，財産に起因する戦いがあった．教主東巴什羅と大鵬神が中に入って裁き，それぞれにその居る所を得させ，矛盾はやっと解決した．そのなかで，人類は生活に必要な場合に，山林を伐採し，山地を開墾し，泉の水を引き，魚を捕り，狩猟を行ってもよいが，適切な量にとどめて多すぎてはならず，さらには署神に供物をささげて祀り，署神の損失を償わなければならないことが決められた．これが署神祭祀の由来である．東巴経典はさらに「署神は人類の出産と繁栄を司り，人々の寿命を掌握している」と記している．それゆえ，家族が繁栄し健康で長寿を願うなら，署神竜神(16)に供物をささげて祭祀を行わねばならない．こうした理由から，「求寿」において署神

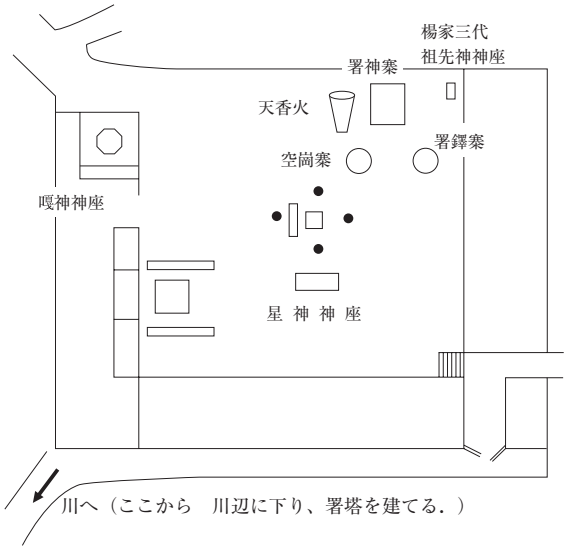


図５　４月４日の配置図

写真８　署神寨（筆者撮影）

祭祀がとりわけ重要なのである．

○神座，鬼寨の設置（図５）

署神祭祀の神壇は，主に三つの大神神座，署神寨（写真８），天香火，署鐸寨，空崗寨，署塔などに分けられる．

西側家屋の三神座と中庭の松樹「督」の神座はそのままで，この儀式においては大きな役割はない．天香火は署神寨の傍らに移す．署神寨が祭祀の主な対象である．署鐸寨は鬼たちのために設けられたもので，鐸（すなわち傻，憨，愚，痴）は署の種類の中で人類に危害を加えるものである．空崗は署の種類の中で入り口を守る者で，人類に対して良い者も悪い者もいる．それゆえ，この２種類は分けてそれぞれに祭祀を行わなければならない．署塔は，専らこの祭祀のために高山の柏樹を用いて作る．そして絵を描いた木牌をさすことにより塔内や塔の底に金銀トルコ石など宝石や五穀五宝を置いたことを表すが，これらは署神を安んじ心を落ち着かせるための財宝である．署神など多くの神が永遠にこの塔にとどまってくれるようにという願いが込められている．この塔は楊家がいつも水を汲み，線香をたてて署神竜神を祭る水源のわきに建てられる．

○祭祀の順序

①署神を呼び覚まし，署神寨の前で天香火を焚き，署神を祭る．

②神座の前で，神座を設けて祭糧を献ずる意義を述べ，署神祭祀の順序を述べる．

③諸神霊に天香火を焚き，諸神霊を迎える．

④署神神座の前で読経し，署神の来歴を述べる．署神に，署司沛（王）を招くことを願う．

⑤人と署の間に矛盾があったが，それが解決した故事を述べる．猛鬼恩鬼を殺す．

⑥柏樹で作った署塔を担いで，楊家の正門から出て下の川辺の泉の水源まで行き，建てる．天香火を焚き，署神の損失を償い，薬を献上する．

⑦佐瑪祖先[17]を迎える．

⑧署に里多面偶を施す．

⑨署鐸を鎮め，空崗を祭る．

⑩署鐸の巻き付けていった縄を解き，楊家主人のために招魂をおこなう．空崗に木牌を送り，署鐸に祭木を送り，下流に流す．

⑪祖先と署神の間の故事を述べる．

⑫署神竜神に薬を献上し，損失を償う．

⑬署神に雌鶏を生きたまま捧げて願をかける．署神に五色鶏を献じる．

⑭署神門を開き，幸福と長寿を願う．幸福を願う木牌を楊家に与える．

⑮五方署神に木牌，面偶，樹枝を分けて与え，五方署神の損失を償う．

⑯署神を送り，五方署神の木牌，面偶，樹枝を主要な水源に持って行き，挿す．

⑰神を安んじる．

なお，この日の昼は，この儀式に参加者全員が精進のみを食べ，署神に対して礼を失しないことを示した．

写真９　捧げられたブタの頭（筆者撮影）

（２）楊家の斯補（近三代）祖先神を招く儀式

斯補祖先とは，近三代祖先のことである．「求寿」において，近三代祖先を迎えて供養する目的は，その加護と支持を願うためであり，その神座は中庭東北の隅に設ける（図５）．楊玉勛が主人の代理として墓地から斯補祖先を中庭の神座に招き，線香をともし，酒を地に注いで捧げ，ご飯を供える．それ以降「求寿」が終わるまで，毎日三度新しい食事を供えて祀る．

（３）嘎神（戦神･勝利神）祭祀儀式

嘎神は，遠祖の中の戦神と勝利神の象徴である．東巴教では，遠祖の中で16の戦神が最も勇敢かつ有能であるとしているので，戦神の祭祀はこの16の戦神を祭る．戦神である嘎神の祭祀は，夜間に行わなければならず，かつ女性は参加することができない．

○神座の設置（図５）

楊家の西側家屋の北側にある部屋のいろりの南側に，３つの節目から出ている枝の総和が16本（上の節目に６本の枝，中の節目に５本の枝，下の節目に５本の枝）の松樹を嘎神樹として立てる．その前に，16本の松の枝，16枚の広葉のつつじの葉，16個の石，16の供物を置く．災いを防ぎとめる１本の白楊木の棒を立て，その上にたまごを一個のせる．祭司はいろりのまわりにすわり，嘎神のほうを向いて読経し，祭祀を行う．

○祭祀の順序

①歴代の嘎神を招来し，いけにえをささげる．ブタの頭と豚肉を捧げる（写真９）．

②歴代の嘎神にご飯を捧げる．16人の嘎神に食事を捧げるとき，それぞれツツジの葉の上にのせる．これは火を通したものである．

③嘎神に富貴になる幸福を願う．最後に，16枝の松樹枝をいろりのわきの「天柱」と呼ばれる柱に縛る．嘎神の祭木，祭石をきちんとしまう．

（４）星神祭祀儀式

星神祭祀は，28の星座神を祭る．東巴教では，28の星座が人の生死，幸福，富貴を司っていると考えるので，星神は大神の一である．祭祀は，決まりに従い夜間「子」の時刻（深夜11時から１時）に行う．

○神座の設置（図５）

中庭の松樹「督」の南に，28本の黄栗樹を立て，28個の神石を置き，28碗の酒，茶を供え，28枚の広葉のつつじの葉を置き，災いを防ぎとめる１本の白楊木の棒を立てる．供物机を置き，炒ってはじけさせた米，一頭の子豚を用意する．

○祭祀の順序

①28の星座神を招き，子豚を殺して祭る．

②豚肉を煮て，28の星座神それぞれに捧げる．

③星神に加護を願い，星神を送る．

４　４日目（4月５日）羊日，清明節

（１）「祭風」儀式

納西語で，風を「酣」，「祭風」を「酣刻」という．風には自然の属性もあれば，社会的な属性もある．

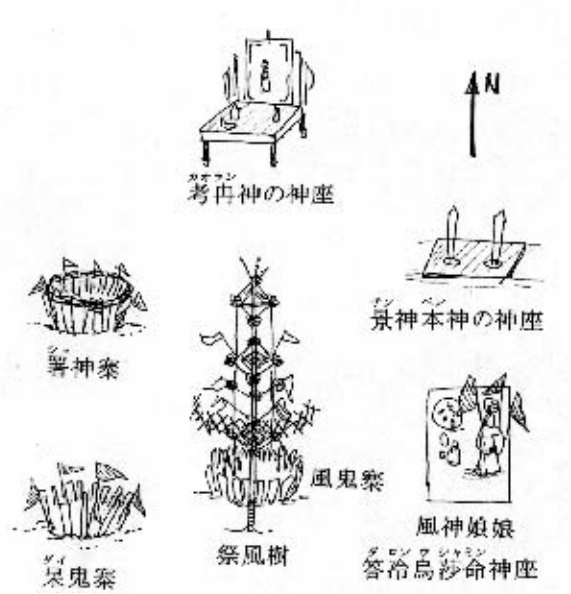


図６　４月５日の「祭風」配置図

風は常に雲とともに語られ，その風と雲の自然の属性は，天気の晴れや曇り，万物の成長，季節の変化，時間の流れなどの自然現象に対する影響をいう．これに対し，社会的な属性もある．すなわち，若者たちが自由な愛情に満ちた結婚と，幸福で豊かな天国の生活にあこがれて自殺すると，このように愛情のために命を絶った者の亡霊が,自然の風と一体となって，亡霊界の一族となることをいう．

東巴教信仰の風は,このように二重性を持っていて，一方で風は神であり，東巴教信仰の大神二十余種類の一である．風はどこにでも，いつでもいて，神秘的かつ世の中の奇異な力である．東巴教徒たちは風神を敬い，風神を祭祀する．他方で風もまた鬼であり，東巴教が信仰する亡霊鬼界の一族である．彼らは愛情と幸福を求めて命を絶った者の亡霊（吊死鬼，情死鬼などともいう）で，風の力を借りて人類社会に影響を与え，生きている人の社会生活にたたる．このため東巴教徒たちは風鬼に供物を捧げて祀り，風鬼を排除するのである．「祭風」とは，風鬼を排除するという意味であり，あるいは風鬼がもたらした災厄を排除すると理解してもよい．それゆえ，「祭風」は，規模の大小にかかわらず，いずれも二重の機能を持っており，一に自然の風神を祭り,二に社会の風鬼を祭祀するのである．ただ，それぞれ具体的な儀式の中でいずれに重点が置かれるかはそれぞれ異なる．楊家の今回の「求寿」中における「祭風」も，やはり二重の機能を持つものである．

○祭壇の設置

二つの段階に分かれる．

第一段階は，楊家の中庭，主に西側の三神座の前で行う．この日の祭祀においては，優麻（ヨウマ）神座のところに祭られている考冉（カオラン）神（鎮鬼大神）が最も重要である．天香火を焚き，松樹「督（ドゥ）」神座もいつものように供養する．

第二段階は，楊家の西側の小さな山の上にある伝統的な祭風場に，考冉（カオラン）神座，天香火，署（シュ）神寨，風神娘娘の答冷烏莎命（ダロンウシャミン）神座[18]，風鬼寨，呆（ダイ）鬼寨などを設けて行われた（図６）．考冉（カオラン）神座，天香火，署（シュ）神寨は北側に，答冷烏莎命（ダロンウシャミン）神座は東側に，風鬼寨，呆（ダイ）鬼寨は南側に設置した．第二段階には，景（チン）神本（ベン）神祭祀が加わるので，景（チン）神本（ベン）神の神座を東北の隅に設けた．

○祭祀の順序

①楊家中庭の神座の前で諸神霊を招き，神座を設け祭糧を献ずる意義を述べ，神霊に祭糧を献ずる．

②天香火を焚き，明かりを点して供養する．

③神座の前で，風鬼の来歴を述べ，祭風の理由を陳述する．

④粉を練ったかたまりを用いて楊家主人の身上の災厄を吸着させ，鬼や妖怪が主人の体に絡みつかせた縄を解除する．

⑤考冉（カオラン）神像とさまざまな供物と道具を持ち，祭風樹を担ぎ，山羊を引き鶏を抱いて，祭風場に行く．

⑥神壇，鬼寨を設ける．

⑦神壇の除穢を行い，神霊を迎える．

⑧天香火を焚き，盧（ルー）神が降臨し，威力を身体に賜るよう願う．

⑨風鬼寨の前で，吊死鬼，情死鬼，風鬼，雲鬼の魂を呼び，風鬼寨に来るよう招く．

写真10　風神娘娘答冷烏莎命（ダロンウシャミン）（筆者撮影）

写真11　「祭風」における東巴「弓箭」舞（考冉舞）（筆者撮影）

⑩署神寨の前で『署神来歴経』『給署神献薬，還債経』などの経典を読み，署神を祭る．

⑪鬼寨の前で『山羊来歴経』を読み，山羊を殺し，雲鬼，風鬼，呆鬼などに捧げる．血を捧げての祭祀，煮たものを捧げての祭祀を含む．

⑫風神娘娘の答冷烏莎命とその七人の姉妹を祭り，鶏をいけにえとして捧げる（写真10）．鶏を殺し，血を捧げての祭祀，煮たものを捧げての祭祀をおこなう．煮たものはご飯，鶏肉，スープなどにして捧げる．

⑬景神本神を祭る．まず豚肉を生のまま捧げ，煮てからはご飯，肉，スープなどにして捧げる．

⑭煮た山羊の肉，ご飯などを雲鬼，風鬼，呆鬼などに施す．

⑮雲鬼，風鬼，呆鬼などを追い払う．

⑯神座の前で，考冉神を迎える経典を読み，考冉舞（写真11）を踊り，風鬼寨，呆鬼寨のところに行って鬼を鎮める．鬼寨を壊す．

⑰楊家のために招魂をおこなう．

⑱鬼門を閉め，鬼をさえぎり，防ぐ．

⑲神を送る．

⑳道具をまとめ家に帰る．

（2）景神（雷神），本神（稲妻神）祭祀儀式

景神と本神は雷公，電母であり，自然神に含まれる．「祭風」においては，往々にして単独に神座を立てて祭祀を行うが，「祭風」の一部でもある．付属的な祭祀と見てもよい（具体的には「祭風」の項に記述）．

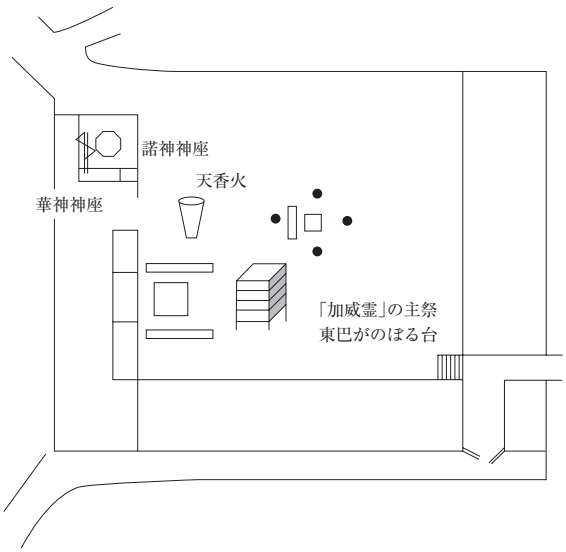


図7　4月6日の配置図

5　5日目（4月6日）猴日

（1）「加威霊」儀式

「加威霊」は，納西語で「旨嶂」という．「旨」は威力，また威力神の名称でもある．「嶂」はすなわち「加える」「増加」で，これを受け入れることをあらわす．東巴教には『旨嶂』経典があり，大，小の2冊に分かれる．この経典の題名は，祭司の体に威力を附してくれるよう神に求めるという意味である．そしてこの「加威霊」とは，「加威霊」により神の威力を附与されたことのある東巴大師に依頼して，拉旨鐸命大神

写真12　「加威霊」における台上の和秀東（筆者撮影）

写真13　「神米」が撒かれるのをじっと待つ東巴たち（筆者撮影）

の神座を設け，神に勝利白綿羊をささげ，いまだ受けたことのないことのない東巴の弟子のために，専ら威力を附与するための儀式を執り行うことを指す．宗教的な意義から言うと，この儀式を行うと，神との間に直接の交流があった，通霊をおこなった，体に神の力を受けたことをあらわし，あるいは祭司の体および思想が神との間に特殊な秘密のつながりを持ったともいう．

「加威霊」では通常，主祭司を通じて神に法名を求め，この法名をもらうと，正式に神の威力を附与されたことになる．また祭司ではない者や未成年がこの儀式で神の賜る名を求め，それがかなった場合には，東巴教神霊の加護が得られたことを表す．

○祭壇の設置（図７）

西側家屋の三神座はそのままである．ただ，この日の儀式は拉旨鐸命大神の神座を主とする．松樹「督」の神座もまた重要で，松樹「督」の傍らに西向きに四角い机を5つ重ね，松の木のはしごをかけ，松の枝を差し込み，机の上に祭司の座る場所をつくる．天香火の用意をする．また，楊家の斯補祖先神にも特に祭祀をおこなう．

○祭祀の順序

①神座を設け祭糧を撒く意義を述べる．神霊の神座の除穢をおこなう．

②拉旨鐸命などの神霊を招き，天香火を焚いて神霊を供養し,十冊の経文を読む．

③神水を迎える．

④嘎労戦神を迎え，鬼を静める．東巴が鎮鬼舞を踊る．楊玉勛が『迎接三代嘎労祖先経』を読む．

写真14　「加威霊」の東巴舞．後方は見物の村人や子供（筆者撮影）

⑤嘎労戦神に捧げる白綿羊で占いを行う．

⑥呪文を唱え，白水と黒水を用いて綿羊の穢れを洗って除く．

⑦嘎労戦神に綿羊を捧げ，薬を献じる．羊を殺し，血を捧げて祭り，生肉を捧げて祭る．

⑧楊玉勛，楊玉光が斯補祖先，嘎労戦神などにご飯を献じる．花舞，灯舞を踊る．

⑨神霊の降臨を迎え，景神恒迪大神が天門を開く．

⑩松樹「督」の傍らに積み重ねられた５つの四角い机の上で，主祭東巴を象徴する和秀東が「加威霊」の経典を声高に読む（写真12）．そして，みなに向かってたびたび問いを発する，たとえば「大地の上には威力神の居住される所はあるか？」．すると下にいる東巴たちが声をそろえて読経し，答える，「すでにすばらしい場所をご用意いたしました，どうぞ威力神はご降臨くださり，威力を賜りますように.」白獅神の威力を賜るときになると，また上の東巴祭司和秀東が「白獅が降臨される，白獅の住まうところはあるか？」と問う．下にいる東巴たちは「私たちの，ここにあります．白獅は高山のなになに地方にお住まいですが，私たちの，ここにも白獅神をお祭りする場所があります．神霊のお助けをいただき，白獅神の威力を下されますよう，白獅神が我々をご加護くださいますように」と答え，白獅舞を踊る．・・・このような対話を繰り返したあと，上にいる東巴祭司和秀東は読経しながら下に向かって「神米」を撒き，神が降臨し，威力を賜ったことをあらわす．下にいる東巴たちや威力を求めての参加者たちは，盤鈴などの法器で，先を争ってこの「神米」を受け，急ぎかつ敬虔にそれを口に入れ，早く威力を得られるよう願う（写真13）．東巴たちは，降臨した神の名と賜った威力にもとづき，さまざまな種類の東巴舞を踊り，その威力を得たことを示す（写真14）．

以上が繰り返し行われた．

⑪法名が紙にかかれて東巴たちに下賜され，50人ほどが受け取った.受け取ったものは３－５元を献上し，神に感謝を示した．

⑫斯補祖先，嘎労戦神を送る．

和秀東が台上から「神米」を撒きはじめると雰囲気はきわめて熱気を帯び，壮観である．加えて，老東

巴和秀はずっと下で指揮をとった．およそすべての村民が参加したこの儀式は絶えず盛り上がりを見せ，今回の儀式の中の最高潮を形成した．

（2）大規模「焼天香」儀式

「加威霊」がまだ完全に終わらないうちに，中庭中央の松樹「督」の傍らで，12種類の樹枝を一まとめに縛って，天香火の用意をする（図7）．傍らに四角い机を置き，その上に天香火を焚くとき用いる酒，茶，酥油，薬，面偶などを置く．

儀式は和世先が主となって執り行い，楊志堅らが助手を務めた．

○祭祀の順序

①神に祭糧を献じ，神霊を迎える．

②神霊の祭壇，供物の除穢をおこなう．

③祭儀の由来を述べる．

④盧神と沈神を招き，威力を賜るよう願う．

⑤神に天香火を焚き，食べ物で供養する．

⑥大威力神を迎える．

⑦神霊に里朶面偶を献上する．

⑧梭刷火把（たいまつ）の来歴を述べ，『大型焼天香祭献神霊経』を読む．

⑨盧神と沈神に食べ物を献上し，盧神と沈神を送る．

⑩諸大神を送る．六字真言を読み，天香火をまわって五方に神を送る．

（3）華神など大神を招来しての，賜福および「求寿」儀式

この「求寿」が，全体としての「求寿」の核心であり，命名の理由である．「求寿」は納西語で「汝仲畢」という．「汝」は年齢，寿命，「仲」はつなげる，延長する，「畢」は読経，祭祀を意味し，全体として，主人の寿命を伸ばすよう神に求める儀式である．略して「求寿」という．儀式の経典にも「主人一家の年齢が足りないなら，神霊に年齢を求め，主人一家の寿命が足りないなら，神霊に寿命を求める」「寿命を願えば寿命が得られ，長寿を願えば長寿が得られる」と記されている．

○神座の設置（図7）

神壇は，諸大神の神座，長寿松柱「督」の神座，華神の神座，恭労構神（恭労構補と恭労構姆，男女の寿星）の神座に分かれる．諸大神の神座は引き続き楊家西側家屋に祭られているが，この儀式においては添え物に過ぎない．中庭中央の長寿松柱「督」神の神座が，とりわけ重要であり，長寿神を迎えるしるしである．

華神の神座は，楊家西側家屋の北側の部屋のいろりわきの柱「天柱」の傍らに立てる．天柱の上の屋根の板を取り外し，屋根の上から華神の柏の神梯，神塔，赤い布と白い麻布を家の中に入れる（写真15）．それらは天柱に沿って下におろされ，神座の上に至る．神座の上にはさまざまな供物が置かれる．

恭労構神の神座は天柱の上方の屋根の上に置かれ，天香火がたかれ，唐箕に9節の華神木，9本の華樹枝，9個の華神石，丸く固められた酥油，9碗の華神水を象徴するやかんに入った聖水が用意される．その傍らに和明老夫婦（和明は地元の東巴の一人，72歳．前掲表を参照）がすわり，恭労構補と恭労構姆を象徴する．恭労構補は屋根の上から華神木，華樹枝，聖水などを

写真15　屋根の上から華神の神梯を家の中に下す（筆者撮影）

写真16　「求寿」儀式をうける楊玉華夫婦（手前左端と中央）とその一家（筆者撮影）

下におろし，主人一家に与える．さらに祭司和秀東がすわり，子女がそろい幸福な家庭をもち，神霊が年齢と寿命を賜ったことを象徴する祭司和力民がすわる．

○祭祀の順序

①諸大神の神座の傍らで『迎請華神立長寿松柱督経』を読む．

②長寿松柱「督」の傍らで，神に天香火を焚く．

③恭労構神の神座の傍らで『迎請華神迎請恭労構補神経』を読む．

④いろりわきの華神神座の傍らで華神の来歴，長寿樹の来歴，華神の柏の神梯の来歴，華神石，華神水，華神木，華神酥油の来歴を述べる経典などを読む．

⑤華神にいけにえを捧げる．

⑥華神にご飯を捧げる．

⑦長寿の福を求めると，屋根の上から華神木，華神樹枝，華神石，華神酥油，華神水などが一つ一つ下におろされ，主人一家（写真16）に与えられる．

⑧恭労構補と恭労構姆が，主人一家の家人の首に長寿の五色紐を結んでやる．家人は感謝して酒を捧げ，額を地につけて拝礼する．

⑨主人一家のために富貴の威力を求める．

⑩玖補大神を迎え，富貴の門を閉める．

（4）諾神（家畜神）祭祀儀式

「諾」は納西語で家畜神をあらわし，家畜をつかさどる．「畢」は読経，祭祀を意味するので，「諾畢」は家畜神を祭祀する儀式である．家畜の飼育は食糧生産と関係があるので，諾神祭祀儀式においては食糧神に対しても祭祀をおこなう．食糧神は「萵」あるいは「萵美恒」という．諾神祭祀儀式の機能は，主人一家が諾神，萵神の加護を得て，気候が順調で，五穀が豊作，六畜が盛んに繁殖するよう願うものである．

○神座の設置（図７）

楊家西側家屋の北側の部屋において，いろりの東南隅に，諾神の神座を立てる．東側の壁よりのところに青松を撒き，左から右に，18尊の諾神の象徴物をならべる．それらは，皮を剥いだ長さ約８寸（20センチ）の松の枝18本，神石18個，広葉のツツジの葉18枚であり，さらに酒と茶各１碗を供える．明かりを点し，香火をたく．これらは諾神の神座のためである．諾神神座の前に，唐箕に入れた食糧を置く．また食糧を置く台の模型を置いて麦，トウモロコシなどをのせる．さらに一組のはしの大きさの殼竿（脱穀用の農具）と小型のひき臼の台を引っ張る道具も置く．また別の唐箕のあたりに，竹で編んだ弧形のまがき二つを置いて家畜小屋とし，その中に松ぼっくりをいくつかおいて家畜を象徴し，小さな木のおけをおいて家畜に水をやるおけを象徴する．

○祭祀の要領

この儀式は二人の祭司でおこなう．主祭司は読経を受け持ち，もう一人の祭司は主祭司を補助し，神霊に供物を捧げる．祭祀の中には，収穫と脱穀，家畜の放牧にかかわる芝居がかった応答によって話を進める場面も挟み込まれている．それらは労働の息吹と世俗の生活のおもしろさに富み，たえず人々の笑いを誘う．

○祭祀の順序

①神座におかれた神霊への供物と，神霊の祭祀用品の除穢をおこなう．

②18尊の諾神と萵美恒神を招く．

③諸神に豚肉（ベーコン）などを生で捧げる．

④多くの諾神と萵美恒神にご飯を捧げる．酒，ご飯，肉，スープはそれぞれツツジの枝葉の上に置き，ご飯を捧げたことをあらわす．

⑤農業の収穫と脱穀の過程を応答によってあらわす．

⑥家畜の放牧と飼育の過程，家畜が繁殖して売る過程を応答によってあらわす．

⑦各地の豊かな家畜神と食糧神を主人の家に招く．

⑧神を安んじ神に祈る．諾神の祭祀用品の神木，神石を竹篭に入れて壁にかける．

6　6日目（4月7日）鶏日

（1）山神祭祀儀式

納西語で山神を「市忍」といい，山神祭祀を「市忍宋」という．東巴教では，山神は非常に多く，十二尊の山神をその代表としている．それゆえ山神祭祀の樹木は12本を基本としている．一般に山神祭祀は東に向いて行い，山神は馬に乗るので，祭祀のとき米と塩，茶を置くことになっている．山神には気候が順調で，家人の繁栄と健康，五穀豊穣，家畜の盛んな繁殖を祈る．

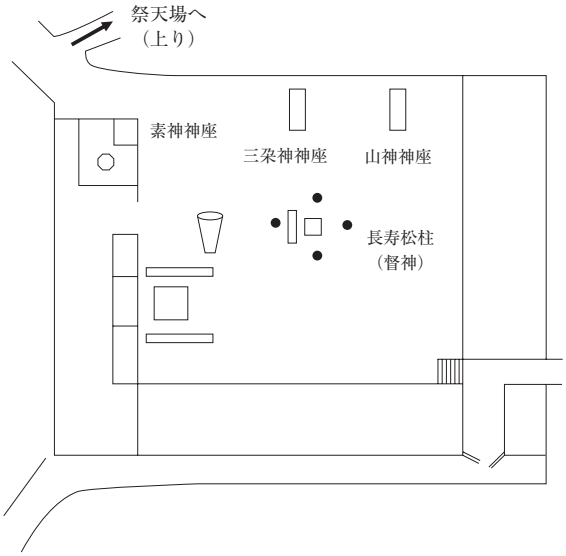


図８　４月７日の配置図

○神座の設置（図８）

楊家中庭の北側に東向きに机を置き，山神樹12本を立てる．机の上に青松を撒き，左から右に，皮を剥いだ長さ約20センチの白松の木12本を並べて神木とする．そして広葉のツツジの葉12枚，12の酒の碗，茶，酥油などと米と塩，茶をおく．天香火を用意する．雄鶏一羽を用意する．

○祭祀の順序

①山神の神座，供物の除穢をおこなう．

②山神を迎え，豚肉を生のまま捧げて祭る．雄鶏を殺し，血を捧げて祭り，煮たものを捧げて祭る．

③山神にご飯を供える．

④災いをはらう．

⑤卜占をおこなう．

⑥神を送る．

（２）三朶神（地域神）祭祀儀式

「三朶」は納西語で玉龍雪山を象徴し，「三朶宋」は三朶神祭祀をあらわす．三朶神は麗江納西族地区最大の地域神であり，納西族東巴教の最も重要な山神の一である．納西族東巴教では，三朶神は納西族の守護神と考えられており，子どもが生まれて三日目には三朶神を祭祀し，幼名を付ける．兵隊に行く，あるいは兵隊を率いて戦争に行くときも，三朶神を祭って加護を求める．商売をするものは，三朶神の加護を得られるともうかるという．子授け，学業の向上，遠くに出かける，狩猟などいずれの場合にも三朶神の加護を求める．

「求寿」で三朶神を祭るのは，三朶神に家人の健康と長寿を加護してくれるよう願うからである．三朶神の祭祀は長寿と幸福を求めるうえで有効である．

○神座の設置（図８）

三朶神の神座は，山神神座の左側に設け，経机の設置は山神と同様である．供物も同様である．

○祭祀の順序

三朶神の祭祀全体は一冊の経典の中にある．

①除穢．

②三朶神に線香をあげ，酒を献上する．

③三朶神にいけにえを生肉で捧げ，祭祀をおこなう．豚肉，雄鶏，米，塩，茶，生姜などをささげる．雄鶏を殺し，血を捧げて祭り，煮たものを捧げて祭る．

④神に煮た食べ物を献じる．

⑤災いをはらう．

⑥卜占．

⑦神を送る．

（３）「祭天」儀式

納西語で「姆」は天，天神，「畢」は祭祀，「祭天」を「姆畢」という．自然の天も，社会の天神の意味もある．

「祭天」は一に自然界の天，地，柏の三神を祭る．二に納西族女始祖衬恒褒白の父親，母親，舅父（母方のおじ）の三神を祭る．この三神はまさに，納西族始祖崇忍利恩の岳父（妻の父），岳母（妻の母），岳舅

写真17　「祭天」儀式（任春生氏撮影）

（妻の母方のおじ）にあたる祖先である．それゆえ，「祭天」で祭るのは自然の天であり，社会の天神でもあるといえる（写真17）．

「祭天」の目的は，遠古祖先から後の世代が繁栄してきた歴史を述べ，天神と遠祖神に，これからの気候が順調で，子女が繁栄するように，健康で長寿，子孫が繁栄するよう祈ることにある．

○神座の設置（図８）

楊家一族の祭天場の中の北側の少し高くなったところに神座を設ける．中央に一本の柏樹を挿し，舅父神とする（母方のおじの納西族における地位は非常に高い）．その西側に一本の黄栗樹を挿して天樹とし，東側に一本の主幹が二股に分かれている黄栗樹を挿して地樹とする．柏樹の後ろに１本の白楊木を挿し，その上に鶏卵を一個のせる．これを災いを防ぎとめる捧という．鶏卵は鶏の代わりであり，もし災害があれば，鶏がそれを跳ね返すことができると考えられている．３本の神樹の傍らには，それぞれ木偶が２つ挿してあり，それらは主神の従者である．また３本の神樹の傍らには，それぞれ神石が一個立てられている．神樹の前には神糧，供物が置かれている．神座の右上方には天香火が用意される．祭天場神座の南にはかまどがあり，いけにえを煮て捧げるためである．

○祭祀の順序

①天父，地母，柏舅に線香をあげる．

②天，地，柏の３神に捧げる黒豚に聖水をかける．

③黒豚を殺し，天，地，柏の３神に捧げ，祭天の来歴を述べる．

④天，地，柏の３神にご飯を差し上げる．

⑤神を送る．

（４）竜神を送る儀式

この儀式は納西語で「魯布（ルブ）」「魯布督系（ルブドゥシ）」という．「魯（ル）」は竜，「布（ブ）」は送る，「督（ドゥ）」は長寿松柱，「系（シ）」は下に置く，倒す，全体で「竜神を送り，長寿松柱を倒す」をあらわす．この儀式は独立したものではなく，前日の「求寿」の最後の部分である．祭司は竜神の経典を読み，天香火を焚き，竜神を送る．そのあと，人々は長寿松柱を倒すと，それに付いていた紙の花などの飾り物を争って取り，これを得られると幸福を得たことをあらわす．神を送る儀式が終了すると，大神神座を片付けることができる．

（５）素（ス）神（家神）祭祀儀式

「素（ス）」は納西語で，家神をあらわす．素（ス）神祭祀にはいくつかの形式があるが，「求寿」の終了時に行う素（ス）神祭祀は，小規模なものに属する．素（ス）神は家族の人数，家屋，敷地，家畜，土地，食糧，財産を司る神である．東巴教では，家中のあらゆるものにみな生命，霊魂があり，それらはすべて素（ス）神によって統率されていると考え，家でおよそ大きな儀式を行うときには，これら素（ス）神によって統率されている霊魂を驚かすことを恐れる．それゆえ，最後にこの素（ス）神祭祀の小さな儀式を行い，素（ス）神を迎え，驚いて散っていった家人，家屋，敷地，家畜，土地，食糧，財産の霊魂を呼び戻し，祭祀をして安んじ，供養することになっている．そして主人一家が繁栄し，健康で長寿であるよう，食糧が豊作であるよう願う．そして家畜が繁殖して財産が増え，日々楽しく，水源が十分あるように，４代がそろうよう，吉祥如意であるよう祈る．

○神座の設置（図８）

楊家西側家屋の北側の部屋で行う．いろりの東北の隅に神龕を（北側の壁上）に設け，素（ス）神の竹篭を置き，素（ス）神の画像をかけ，経机には酥油，ベーコン，酒や茶，明かり，線香などを置く．素（ス）神祭祀の天香火はいろりの三本足の五徳のところでたく．素（ス）神祭祀と同時に竈神も祭る．

○祭祀の順序

①この祭祀を行う目的は，素（ス）神が驚いて外に逃げてしまわないように，家中の霊魂が驚いて鬼域に行ってしまわないようにするためであることを述べる．

②神木，神石を立て，祭祀，除穢，いけにえを捧げる，血を捧げる，食糧を捧げることをほのめかす．

③素（ス）神に天香火を焚き，供養する．

④北方の祖先の集居地へ移動する道より，主人の家より散っていった素（ス）神を呼び戻す．南方の穢鬼の地より，主人の家より驚いて散っていった素（ス）神を呼び戻す．

⑤神の長寿薬の来歴を述べ，素（ス）神と家人に薬を献じる．

⑥素（ス）神にご飯を捧げる．

⑦諸素(ス)神，家中の家屋，敷地，家畜，土地，食糧，家人に酥油を捧げる．

⑧素(ス)神の幸福を呼び戻す．最後に神木，神石などの神物を素(ス)神の竹篭に入れ，神龕のある高いところに置く．儀式はこれですべて終わりである．

Ⅸ 儀式を終えて

ここで述べておかなければならないことは，以上約20の儀式には多くの小さな儀式が含まれず，かつ大きな儀式は6，7時間もの時間を要したことである．儀式は基本的にこの順序で行われたのだが，時には二手に分かれ，また中庭，村落各地で同時進行もあり，「祭風」と「祭天」がそれぞれの場所で行われたことはすでに述べた．

儀式の期間中，東巴たちは延べ200冊以上の東巴文字で書かれた経典を読み，「白獅舞」「射箭舞」など20近い東巴舞を踊った．終日，線香や松の枝をいぶす煙が立ち込め，神前には小麦や粘土で作ったさまざまな人形，米などの穀物，酒，茶，酥油(バター)，塩，砂糖，香炉，ランプ，ローソク，聖水の碗などがところ狭しと置かれた．さらには，署神祭祀にどうしても必要な野生動物キョン（小型の鹿）の肉も，さまざまな曲折を経てやっと入手することができたという．祭場は夜になっても明かりがともされ，賑わいが続いた．

この6日間に神霊や鬼に捧げられたいけにえの家畜は，黄牛1頭（4歳，オス），高原で3年間放牧された山羊3匹（黒色，白黒半々，蹄部分だけが黒い白山羊各1匹，いずれもオス），白綿羊1匹（オス），黒毛豚2頭（3歳，オス），大きな雄鶏20羽にのぼった．いけにえを殺す前，すべては神霊や鬼に捧げるために規則どおりに行なうのであるから自分たち東巴には罪はないという意味の経文が読まれ，専らこの方面をつかさどる東巴が頸部にナイフを刺した．一般に，家畜はあわせて4回捧げられる．まず生きたまま捧げられ，これを「活祭」という．つぎに流れ出た鮮血で祭る「血祭」，切り分けた主要な部位で祭る「生祭」，最後に煮たもので祭る「熟祭」がある．

また百枚以上の巧みに描かれた木牌，粘土や小麦粉で作られた数十もの人形，真に迫った表情の紙製の羊，樹枝で編まれた馬，踊りに使う花束，弓矢などが作られ，準備途中の品々もあり，その数は天香を焚くに使うために切り出されてきて積み上げられた松の枝だけでも山のようであった．

もともと1週間以上の内容であったため，連日，夜になっても昼のように灯りがともされ，引き続き儀式が行われた．最も遅い日では，4月4日の戦神祭祀が深夜の3時半まで続いた．昼もご飯を食べる時間のないときは，マントウを口に放り込んではあわただしく撮影や記録を続けた．こうして我々の調査活動は毎日十数時間を越えていた．

実際，今回の儀式には人々は村中をあげて参加していた．特に「加威霊」の時には，遠近より200人以上も見物に訪れた．その最年少は3ヶ月の乳飲み子であった．この男児には2ヶ月前，この地の東巴によって「焼天香」が行われたばかりという．というのは，この子の家はこれまで3代すべて女の子ばかりであった．納西族の習俗では，もし第1代が女児なら婿を取り，第2代，第3代も女児なら引き続き婿を取ってよいが，それ以上女児が続くのであれば婿を取ってはならず，嫁に出さねばならない．この男児はこうした折に幸いにも授かった男児なので「焼天香」が行われたのだという．そして最高齢は73歳の老婆であった．人々はみな，お祭りの日のように一番よい服を着，歓声を上げ，何度も興奮の渦に包まれた．小学生は，先生に引率されて見物にやってきた（写真18）．

しかるに，儀式の側には「人に見せるため」という意識は少しもなかった．東巴たちはただ敬虔な信仰心から，抑揚を付け，間をおき，調子を変えては経文を

写真18　見学に来た村の子供たち（筆者撮影）

読み，あたかも酔いしれたように，熱に浮かされたように踊った．見ているものたちはこれに歓呼の声をあげ，我を忘れたように興奮の中に身をおいた．こうした姿は感動するに十分であった．

また神霊への人々の畏敬の念を示すものとして，次のようなことがあげられる．華神祭祀に用いる２本の柏の木は，切り倒したのち，牛に引かせたりトラクターで運んだりせず，５キロの道のりを人々が一歩一歩かついで来た．私は美しく描かれた木牌を記念に持ち帰りたいと願ったが，使用した木牌は，３枚を特定の人に送り，残りはすべて焼却するのが神の意であるとのこと，あきらめざるを得なかった．署神は精進しか食べなかったとの記載にもとづき，署神祭祀の日は，全村で１人の例外もなく，肉食をしなかった．星神の祭祀は，ある最も明るい星が一定の位置に来たとき始めることになっており，みな夜中の12時半までひたすらその時を待った．戦神の祭祀時には女性は避けるよう求められた．その理由に至っては，戦神の顔つきが醜く獰猛であるので女性を怖がらせるとか，戦神は下半身を露出しているので女性の前に現れるのは不都合であるとか言う者もいるが，最もみながそう思う理由としては，やはり女性は男性より穢れているという世界の少なからぬ宗教が持っている認識からくるのであろう．つまり，ここで何を言っても仕方がないのである．楊玉華の母親と妻でさえ台所に身を隠した．私とて，この儀式を組織したにもかかわらず，何の特権も持ち合わせなかった．この特定の場所，特定の時間において，神霊の意向は何よりも崇高なものであり，こうしてその場の空気はより神聖になっていくのである．

我々はこの上ない崇敬の念を抱いて神の意志に従った．神もこれに感動したのか，数日前まで雨の降り続いていた署明片は，儀式の前日から連日晴れ渡った．４日の儀式のとき，東巴経の言い方として，儀式が霊験あらたかか否かは雨が降るかどうかによると言っていたところ，雲ひとつない青空から突然一陣の小雨が降ったのである．

おわりに

今回，私・夏を代表とする神奈川大学21世紀COEプログラム，張福龍，和力民両氏を代表とする麗江市東巴文化研究院，撮影技師の任春生氏を代表とする中国社会科学院民族文学研究所の三者が密に協力し合ったことにより，本来の姿の「求寿」に対する全面的な調査が実施され，大きな成功を収めることができた．現中国の商業重視の状況下で行われる利益を得ることを目的とした「公演」に比べ，このような純粋の文化を調査することができたことは，非常に貴重なことである．それゆえ，今回の調査が人類文化の多様性に独自の文化的遺伝子を貢献できると確信している．

今回ともに調査を支えた者たちの中で，ある者は発起人であり，ある者は多くの煩雑な組織化や具体的な調整を受け持った．またある者は理論と実践に精通した専門家として儀式の手配を受け持ち，またすべての活動を貴重な撮影記録として残すことに功績のあった者もいた．さらにこれを文章にまとめる際にすこぶる成果をあげた者もいた．しかも，往々にして一人がこれらの役割をいくつも受けもったのである・・・それぞれの働きはかけがえのないものであり，もちろん大きな功労であった！

調査期間中は予想以上にきつく忙しかったが，充実した興味深い日々であり，生涯忘れられぬものとなった．今，目を閉じると，耳が聞こえなくなるほどの銅鑼の音が耳元に響き，神名を賜り喜ぶ東巴たちの幸せな笑顔が目に浮かぶ．そして署明片の満天の星空が思

写真19　ともに「求寿」を復活させた張福龍氏，和力民氏，任春生氏，林雅子さん，趙婕さんたち同志と「祭風」場にて

い出される．今回の立案，場所の選定すべてが正しかったことを事実が物語っている．北京と麗江の専門家たちもみな，今回の儀式は納西族のこの半世紀近くにおいて最も意義のあるもので，東巴たち，とりわけ若い東巴たちにめったにない実践的鍛錬の機会を与えたと同時に，東巴文化を当地および麗江地区全体において，さらに広く深く普及させ，伝承させたと評価している．人類学，民族学，民俗学，社会学の角度から見ても，そこに含まれる「黄金」の量は非常に多い．我々は今回の貴重な文字，画像の資料を引き続き整理するとともに，以下の課題について研究を深めていきたいと考えている．

（1）東巴たちの踊りなどに見られる身体技法を詳しく分析したい．

（2）東巴儀式と納西族の人々の現実生活との関係を研究する．

（3）今回の「求寿」復活に関する各方面の反応，さまざまな人々（老若村民，老東巴，神名を賜った東巴，儀式を行った楊家など）への影響を調査し，長期的な意義を考える．

（4）東巴陣の現在の状況と若い東巴の養成の方向性．特に代表的な東巴（老齢の和秀の身代わりとして神梯の上から諸東巴に威力を与える役割を果たした和秀東など）について追跡調査を行なう．

（5）現代化や生態環境の変化（具体的には署明村への道路が修理され，閉鎖的な山村が開放的になるなどの変化）が東巴信仰に与える影響．

末筆になってしまったが，今回最も重要な物質的保証をしてくれた神奈川大学COEをはじめ，麗江市東巴文化研究院，中国社会科学院民族文学研究所の各位に衷心より感謝の意を表したいと思う．また麗江東巴文化研究院の李麗芬副研究員は関係資料を収集する上で，また同研究院の王世英研究員は我々に同行し，具体的な説明を行うなどの協力をしてくれた．また日本人の翻訳家林雅子と雲南大学の学生趙婕も記録や整理，翻訳，撮影などに積極的に協力してくれた．ここでご協力いただいた皆様にあらためて心よりお礼を申し上げる（写真19）．

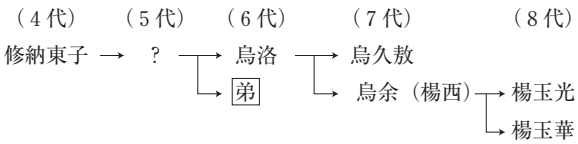
注

(1) 麗江東巴文化研究院が1000種類近い納西族東巴教の古文献を翻訳，整理して100巻に編集したもの．国家の1995年度重点出版事業として行われた．

(2) 署明片の「片」は依隴行政村のうちの一区画を指し，五組の「組」は自然村，村落を現す．五組は「明兆村」ともいう．署明片は署明村とも呼ばれる．

(3) 仏教，道教，キリスト教，イスラム教など人（教主）の創始した宗教をいう．

(4) 楊玉華の家系図を以下に示すので参考にされたい．表中の烏洛の弟が行方不明である．



(5) 李霖燦（1913－99），河南省出身．1930年代末，国立杭州芸術専科学校が戦火を逃れて南方に移転したとき，学生としてこれに随って雲南に移り，ここから彼の納西族東巴文化探求の生涯が始まった．以後十余年にわたって研究を深めて大作を著し，中国で最も著名な納西学学者の一人となった．1940年代末に台湾に渡り，台湾故宮博物院副院長に任じられたことがある．麗江玉龍山のふもとの玉湖村にこの著名な学者の衣冠塚（遺品を納めた墓）がある．

(6)「改土帰流」とは，明清時代，少数民族地区において世襲の土司（官職）を廃除し，一般の州県道府を建て中央より官吏を派遣して統治したことをいう．当地においても大きな事件であったが，彼らの移住と直接の関係はないように思われる．

(7) 黄牛（コウギュウ）とヤクとの一代交配種牛，中国西南地区産．

(8) 麗江白沙は麗江の北約10キロのところに位置する古くからの小さな町．北に玉龍雪山を臨み，南に竜泉，西に芝山がある．納西族が麗江盆地に移住してきたとき最初に居住したところであり，麗江の土司木氏の発祥地である．

(9)『明史』土司伝と『木氏宦譜』によると，麗江納西族首領阿宗阿良の末裔阿甲阿得は，元末に麗江宣撫司副使に任じられ，そののち洪武15年（1382）に明軍が大理を攻めたとき，人々を率いて最初に明に帰属したので，この功により皇帝から木姓を賜り，麗江知府を開いたという．木氏は外来の文化を積極的に吸収したことで知られ，明代は木氏の最盛期であった．

(10) 二種類の東巴文字とは，東巴文字とそれを改造し，発展させた格巴文字を指す．東巴文字は非常に原始的な象形文字であり，東巴がこれを掌握していることから東巴文字と呼ばれる．納西族社会が発展し，また民族文化が相互に影響しあうようになると，明末から清初のころ，麗江の一部の東巴が格巴文字を創り出した．「格巴」とは弟子という意味であり，丁巴什羅の末裔の弟子が創造した文字をあらわす．納西族はこのように二種類の古文字を創造し，今でも使用している．

(11) 以下の儀式の具体的な内容については，基本的に和力民氏の説明を参考にしている．

(12) 古来より納西族には，長期にわたる生産と生活経験から生み出された独自の十二支による日にちの計算方法があり，納西族の天文学方面における成果を反映している．

(13) 盤神と禅神は天地開闢の神，嘎神は男の戦神・勝利神，沃神は女の勝利神，孜神は村寨神である．吾神，恒神と烏神については和氏らによると具体的に説明しにくいとのことである．ほかは後文を参照されたい．

(14) チベット族，納西族，ペー族の祖先が移住してきたとき，途中で亡くなった赤子の鬼魂をあらわし，穢れと考える．

(15) 佛掌参，蜂の巣，海の貝，柏など署神の五官と手足の病気を防ぎ，治す薬．

(16) 署神は漢語に訳されると術神，署竜，竜王などともあらわされる．また署神には竜神，里美神，刹道神，聶神の４種類に大別する説もある．

(17) 佐瑪とは，チベット語の音訳で，大自然を司る精霊をあらわす．

(18) 風神娘娘の答冷烏莎命について，和力民は「祭風儀式与殉情」『東巴文化論』のなかで次のように述べている．（風神娘娘の「娘娘」は女神の敬称．答冷烏莎命と達勒烏莎命は音訳の違いであり，同一人物を表す．）

小祭風儀式においては，主に風鬼達勒烏莎命を祭祀する．『超度達勒烏莎命経』と民間伝説によるとつぎのようである．達勒烏莎命はもともと羊の放牧をする一人の若者を愛していたが，父母は彼女を顔も知らない遠くの男に嫁がせることにした．嫁ぐその日，彼女がラバに乗って紅岩のところまで来たとき，突然くしを家に忘れたことを思い出し，振り返った．瞬く間に左側から白い風が起こり，右側から黒い風が吹いた．白い風と黒い風は彼女とラバを川の向こう側の紅岩のがけに吹き飛ばした．こうして達勒烏莎命は風鬼となり，その形象は永遠に岩の上にのこったのである．

参考文献

郭大烈主編
2002『中国少数民族大辞典』納西族巻 南寧：広西民族出版社．

郭大烈・楊世光主編
1991『東巴文化論』昆明：雲南人民出版社．

麗江東巴文化学校編
2003『納西族伝統祭祀儀式』昆明：雲南人民出版社．

呂大吉・何耀華主編
1993『中国原始宗教資料叢編』納西族等巻 上海：上海人民出版社．

楊正文
1999『最後的原始崇拝』昆明：雲南人民出版社．

雲南省社会科学院東巴文化研究所
2004『納西族東巴教儀式資料彙編』昆明：雲南民族出版社．